

---

# 555 × 禁書外伝 秋の日のビッグスター

辛島剛士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

555×禁書外伝 秋の日のビッグスター

### 【Nコード】

N8793Q

### 【作者名】

辛島剛士

### 【あらすじ】

この作品は、「仮面ライダー555×とある魔術の禁書目録 夢に満ちた街」の外伝作品です。

当然本編を読まなければ十分に楽しめないと思いますので、こちらより先に本編をお楽しみください。

学園都市は、その名のとおり学校の街である。

学校主体の都市であるから、色々な活動は内外問わず街ぐるみで行われる。

運動会――あるいは体育大会も例外でない。

学生たちはこの日のみ能力の全力使用が奨励され、それらを駆使して行われる各学校対抗競技の数々は活気に溢れ、そのダイナミックさは特筆すべきものである。

その大イベントの名は――、「大覇星祭」。

運動会といえば主役は学生だ。だから、中には楽しめない人も少なからず存在する。

例えば学校に行っていないとか。

雪成薫も、その一人。

「まったく、今年も俺の安眠を邪魔しおって」

『大覇星祭』などという大仰な名前がついたところで、その実態は運動会となんら変わらない。

無論この日も、朝から爆竹だの学生たちのざわめきだのが大音量で

流れている。

更に、いつも決まってオルフェノクたちもナリを潜めているという事実もある。

理由は単純明快。彼らだってお祭りは楽しみたいのだ。

だから、いつもなら幾分か静かになったところで寢床へ戻るのだが、今日の彼にとっては良かったとも言える。

「そうか、今日は」

思い出したようにそう呟き、さっさと身支度を済ませて部屋を出て行った。

一人は、佐天涙子。

能力の全力使用、と言ったところで、能力が元から無い者はどうしようもない。

むしろそれに留まらず、競技では相手校が容赦なくその能力を振るってくる。

これでは競技に勝つことは愚か楽しむことすらままならない。

そんなわけで、彼女は『屋台エリア』と呼称される区域にいる。

「ん、今年の屋台はイマイチ」

と、腕いっぱい屋台で貰ったのであろうビニール袋をぶら下げて言う。

彼女は早々に競技を敗退するといつも、このように屋台エリアで憂さ晴らしをする。

暴飲暴食という形で。

例年なら、これは単なるストレス発散と暇つぶしの意味合いしか含んでいないのだが。

「さて、と」

佐天は、手に持った区域マップの赤丸の地点目指して歩いて行く。

一人は、白井黒子。

大覇星祭の中途であろうと、ジャッジメントの活動に休みはない。むしろ、皆が浮かれ警戒態勢に緩みが出る今こそが、ジャッジメントの本領発揮というところだ。

そんな理由があつて、黒子は今いつもの支部にいた。

「あのー・・・固法先輩？」

黒子は顔に汗を流しながら心底気まずそうに、デスクに突っ伏している固法に声をかけた。  
対する固法は、がしやがしやと整理できていないデスクを掻き分けながらそちらに顔を向ける。

「んー、なーにー白井さん」

と、普段の彼女からは全く予想もつかない気怠そうな声で返答した。  
あるうことか顔にはデスクの痕がついている。

それが黒子の心象をより追い詰めることになってしまったが、黒子は構わず続けた。

「前々から言っていた件なのですが・・・」

「ああ」

固法は、先ほどとは打って変わってにこやかな表情で言った。

「ええ、行つてらっしゃい。でも、終わったらすぐに戻ってくる」と。いいわね？」

「はいですの」

黒子は言つやいなやレポートで消えた。  
さておき、固法は再び気怠そうな調子を取り戻す。

「いーなー白井さん」

がしゃん、と彼女はまた机に突つ伏した。

一人は、初春飾利。  
彼女もジャッジメントであるから、今日は警邏で忙しい。  
・・・はずなのだが。

「佐天さあ〜ん」

ひいひいと、黒子が流したのとは別の意味を持つ汗を流しながら友の名前を呼ぶ。

両手に屋台で買った大量の食べ物をごらさげて。

対して佐天は、涼しい顔でそれを見た。

「何？初春」

彼女こそ、初春をここに呼び出した張本人である。

その理由は初春の能力にある。彼女の能力は、こういうことにとっても便利がいいのだ。

「まだあと四軒あんだからね！気合い入れな初春！」

「ひえええ〜」

けれど初春は、音を上げるようなことはしなかった。

それは、今日が特別な日だからだ。

大覇星祭より、ジャッジメントの仕事より、何よりも優先して労力を注がなければならない。

今日のこの日は。

一人は、御坂美琴。

彼女はある事情があつて、本日の大覇星祭には不参加である。

レベル5である彼女が不参加ということで、一時は騒がれ語りぐさになっていた。

その事情とは、オルフェノクに腹部をえぐられた影響で入院しているというものだ。

しかし、自分としては自分の体に支障があるようには到底思えないから、かかりつけのカエル似の医者にも何度も参加させてくれるように詰め寄っている。

つい先日、正しくは昨日もそれについて話したばかりだ。

「…けど、何の音沙汰もなしってことは…、やっぱりダメなのかな」

不満げな表情満面に、病室のベッドに寝転がる。

本来ならば今頃、美琴は常盤台中学のエース選手として、そしてレベル5『超電磁砲』として華々しい成果を挙げているところなのだ。既に競技は6割ほどが終わってしまっている。

それらの実況中継をしているTV番組も、美琴の神経を逆なでするだけである。

「みんな楽しんでるのかな」

黒子や初春さんはジャッジメントだし、忙しく働いていることだろう。

忙しさも楽しさのうちということだし、それはそれで楽しそうだ。佐天さんは競技で汗を流していることだろう。

そういえば、さっき佐天さんの学校が負けたとか言っていたような気はするけど。

——クラスみんなはどうしてるだろう。

寂しさからくる不安だけが美琴の心に積もっていく。

多分、今日は皆忙しいだろうから見舞いになど来ないだろう。

「あ、そういえば」

学校に行っていないと言った、アイツはどうしているんだろう。自分はアイツの全てを知っているわけでは無いし、正直それほど内面を読みきれぬわけでもないけど、こういうのには関心がなさそうだ。

もしかすると、こんな時でもオルフェノク退治に奔走しているのか。いや、逆に楽しんでいるのかもしれない。

あーあ、いいなあ。

目を開けると、そこには真っ白な天井があった。  
床も、壁もあった。そこにひとつの部屋が出来上がっていた。

自分はその中にいる。

部屋だが、窓はない。外の様子は、分からない。  
窺おうにも、知る手段が全くない。

そんな完全遮断の様相を呈しているのに、外の音ばかりがいやには  
つきり聞こえる。

声は楽しげで、はしゃいでいるような感じで……。

壁を押し的话れば、何かが変わるんだろうか。  
寂しい。すごく、寂しい。

「……薫」

出てきたのは、彼の名前。

どれくらい時間が経ったんだろうか。

いつの間にやら寝てしまったようで、外は既に薄暗い。

こういうような時に限って、見た夢をはっきりと覚えているものだ。  
美琴は、もう一度だけその名前をつぶやいた。

「薫、何してんのよ」

寂しげにそう言ったとき、その背中に言葉が飛んできた。  
それは、彼女が全く予想だにできなかった声だった。

「なんだ御坂」

「え？」

誰であろう雪成薫の突然の訪問―いや、最初から居たのかもしれないが―に、美琴は思わず顔を真赤にして、あからさまに慌てて言う。

「ななななな、何でアンタがここに・・・」

「俺だけなもんか」

美琴が周りを見渡すと、そこには見慣れた面々が並んでいた。

屋台で買ってきたらしい何品かの食べ物と、それをせっせと並べる初春、手伝う佐天、そして黒子。

黒子はその視線に気づいたようだ。

「あら、お目覚めですの？お姉様」

「御坂さん！どうですか、佐天涙子厳選屋台の食べ物10点！ずら

つと買ってきました！」

「運んだのは私です・・・」

次々と皆が声を上げた。

それを見て、美琴は涙が出そうになった。

ぐつと堪えたが、危なかった。あと一歩で泣いてしまっているところだった。

ううん、泣いてもいいのかな。

「言い出したの雪成さんなんですよ、『あいつも暇だろうし』って  
！」

「こっちもどうせ暇だからな」

美琴は何も言えなかった。

言おうとするが、言葉が喉に詰まって出てこない。

さっきまでの寂しさがなかったようだ。

「あ、そろそろ始まりますよナイトパレード」

「ここからなら綺麗に見えますでしょう」

「ここよりも」

美琴はようやく声を出すことが出来た。  
しっかりと、いつもの毅然とした態度で。

「ここよりも、屋上のほうが見えやすいわよ？」

「ああ、そうだな」

「そうと決まれば・・・レッツゴー！」

「さ、佐天さん速いですよ」

「はあ」

屋上に出たとき、ちょうど花火が始まった。  
学園都市じゅうの照明という照明が落とされ、暗闇のなかに花火が  
打ち上げられる。

美琴は、今いる皆といつまでもいられるようにと、じっと空を見上げた。

「あ、そつだ御坂」

「なによ」

「俺の呼び方、名前に変えたのか？」

「なっ！？」

「別にいいが、急に名前で呼ぶんじゃない」

「わ、分かってるわよ」

「そら、次上がるぞ」

秋のある日、  
空には満開の花が咲いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8793q/>

---

555 × 禁書外伝 秋の日のビッグスター

2011年4月8日22時33分発行